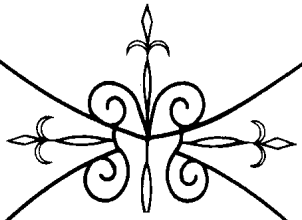
三島由紀夫全集

春の海
（豊饒の海　第１部）

奔馬
（豊饒の海　第２部）

18

三島由紀夫全集



18

XVIII

監修／石川淳　川端康成　中村光夫　武田泰淳
編纂／佐伯彰一　ドナルド・キーン　村松剛　田中美代子

新　潮　社

三島由紀夫全集第十八巻

昭和四十八年七月二十日印刷
昭和四十八年七月二十五日発行

著者三島由紀夫
発行者佐藤亮一
装幀者杉山寧

発行所株式会社新潮社
〒162東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇-一一一一　振替東京八〇八
定価二五〇〇円
第三回配本（全35巻・補巻1）
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
Copyright © 1973 YŌKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集　第十八巻　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春の雪（豐饒の海・第一巻）……七
奔馬（豐饒の海・第二巻）……三九五
解題……八一九
校訂……八二一

三島由紀夫全集 第十八巻 小説 (18)

豐饒の海（第一卷）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春の雪

一

學校で日露戰役の話が出たとき、松枝清顯（まつがえきよあき）は、もつとも親しい友だちの本多繁邦（ほんだしげくに）に、そのときのことをよくおぼえてゐるかときいてみたが、繁邦の記憶もあいまいで、提灯行列を見に門まで連れて出られたことを、かすかにおぼえてゐるだけであつた。あの戰爭がをはつた年、二人とも十一歳だつたのであるから、もう少し鮮明におぼえてゐてもよささうなものだ、と清顯は思つた。したりげにそのころのことを話す級友は、大てい大人からの受賣りで、自分のあるかなきかの記憶を彩つてゐるにすぎなかつた。

松枝一族では、清顯の叔父が二人、そのときに戰死してゐる。祖母は今でも息子二人のおかげで、遺族扶助料をもらつてゐるが、その分は使はずに、神棚に上げつぱなしになつてゐる。

そのせゐかして、家にもある日露戰役寫眞集のうち、もつとも清顯の心にしみ入る寫眞は、明治三十七年六月二十六日の、「得利寺附近の戰死者の弔祭」と題する寫眞であつた。

セピアいろのインキで印刷されたその寫眞は、ほかの雜多な戰爭寫眞とはまるでちがつてゐる。構圖がふしぎなほど繪畫的で、數千人の兵士が、どう見ても畫中の人物のやうにうまく配置され

て、中央の高い一本の白木の墓標へ、すべての效果を集中させてゐるのである。
遠景はかすむなだらかな山々で、左手では、それがひろい裾野を展きながら徐々に高まつてゐるが、右手のかなたは、まばらな小さい木立と共に、黄塵の地平線へ消えてをり、それが今度は、山に代つて徐々に右手へ高まる並木のあひだに、黄いろい空を透かしてゐる。
前景には都合六本の、大そう丈の高い樹々が、それぞれのバランスを保ち、程のよい間隔を以てそびえ立つてゐる。木の種類はわからないが、亭々として、梢の葉叢を悲壯に風になびかせてゐる。
そして野のひろがりはかなたに微光を放ち、手前には荒れた草々がひれ伏してゐる。
畫面の丁度中央に、小さく、白木の墓標と白布をひるがへした祭壇と、その上に置かれた花々が見える。
そのほかはみんな兵隊、何千といふ兵隊だ。前景の兵隊はことごとく、軍帽から垂れた白い覆布と、肩から掛けた斜めの革紐を見せて背を向け、きちんとした列を作らずに、亂れて、群がつて、うなだれてゐる。わづかに左隅の前景の數人の兵士が、ルネサンス畫中の人のやうに、こちらへ半ば暗い顏を向けてゐる。そして、左奥には、野の果てまで巨大な半圓をゑがく無數の兵士たち、もちろん一人一人と識別もできぬほどの夥しい人數が、木の間に遠く群がつてつづいてゐる。
前景の兵士たちも、後景の兵士たちも、ふしぎな沈んだ微光に犯され、脚絆や長靴の輪郭をしらじらと光らせ、うつむいた項や肩の線を光らせてゐる。畫面いつぱいに、何とも云へない沈痛の氣が漲つてゐるのはそのためである。

すべては中央の、小さな白い祭壇と、花と、墓標へ向つて、波のやうに押し寄せる心を捧げてゐるのだ。野の果てまでひろがるその巨きな集團から、一つの、口につくせぬ思ひが、中央へ向つて、その重い鐵のやうな巨大な環を徐々にしめつけてゐる。……

古びた、セピアいろの寫眞であるだけに、これのかもし出す悲哀は、限りがないやうに思はれた。

清顯は十八歳だつた。

それにしても、彼がさういふ悲しい滅入つた考へに、纖細な心をとらはれるには、その生れて育つた家は、ほとんど力を及ぼしてゐない、と云つてよかつた。

澁谷の高臺のひろい邸で、彼に似通つた心事の人を、探すのにさへ骨が折れた。武家でこそあれ、父侯爵が、幕末にはまだ卑しかつた家柄を恥ぢて、嫡子の清顯を、幼時、公卿の家へ預けたりしなかつたら、おそらく清顯は、さういふ心柄の青年には育つてゐなかつたらうと思はれる。

松枝侯爵邸は、澁谷の郊外の廣大な地所を占めてゐた。十四萬坪の地所に、多くの棟が甍を競つてゐた。

母屋は日本建築だつたが、庭の一角にはイギリス人の設計師の建てた壯麗な洋館があり、靴のまま上れる邸は、大山元帥邸をはじめとして、四つしかないと云はれてゐたその一つが、松枝邸なのであつた。

庭の中心は、紅葉山を背景にしたひろびろとした池であつた。その池ではボートあそびもでき、中ノ島もあり、河骨も花咲き、蓴菜もとれた。母屋の大廣間もこの池に面し、洋館の饗宴の間も

この池に臨んでゐた。

岸邊や島のあちこちに配された燈籠は二百にのぼり、島には鐵の鑄ものの鶴が三羽立つてゐて、一羽はうなだれ、二羽は天を仰いでゐた。

紅葉山の頂きに瀧口があり、瀧は幾重にも落ちて山腹をめぐり、石橋の下をくぐり、佐渡の赤石のかげの瀧壺に落ちて、池水に加はり、季節には美しい花々をつける菖蒲の根を涵した。池では鯉も釣れ、寒鮒も釣れた。侯爵は年に二度、小學生たちの遠足がここへ來るのを許してゐた。

清顯が子供のころ、召使におどかされて、怖れてゐたのは鼈であつた。それは祖父が病氣になつたとき、力をつけるために百疋の鼈が贈られ、それを池に放生したのが殖えたのだが、指を吸ひつかれたら最後、とれなくなるといふ話を、召使たちがしたのである。

茶室もいくつかあり、大きな撞球室もあつた。

母屋の裏には祖父の植ゑた檜林があり、そのあたりで自然薯がよくとれた。林間の小徑は、一つは裏門へ出るが、一つは平らな丘へむかつてのぼつてゆき、家中が「お宮樣」と呼んでゐる社殿が、ひろい芝生を控へてゐる一劃に出た。そこには祖父と二人の叔父が祠られてゐる。石段や石燈籠や石の鳥居は型どほりだが、石段の下の左右、ふつうなら狛犬のあるべきところに、日露戰役の大砲の彈丸が一對、白く塗つて据ゑつけてある。

社殿より低いところに稻荷も祠られ、その前にみごとな藤棚があつた。

祖父の命日は五月の末だつたから、そのお祭に一家がここに集まるときには、藤はいつも花ざかりで、女たちは日ざしを避けて、藤棚の下に集うた。すると、いつもよりひとしほ念入りにお化粧をした女たちの白い顏には、花の藤いろの影が、優雅な死の影のやうに落ちた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com